

解放直後の軍民転換と軍需工業の起源（分析レポート 朝鮮民主主義人民共和国の軍需工業 一）

著者	中川 雅彦
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	199
ページ	54-62
発行年	2012-04
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004016

朝鮮民主主義人民共和国の軍需工業(一)

解放直後の軍民転換と軍需工業の起源

中川 雅彦

二〇一〇年九月二八日に開かれた朝鮮労働党代表者会は最高指導者金正日の後継者とされる金正恩が公の席に姿を現したことで注目されたが、もうひとつ重要なこととして、軍需工業に関連する機関名が初めて公の報道に登場したことが挙げられる。九月二九日発朝鮮中央通信が配信し、三〇日の『労働新聞』等にも掲載された党代表者会で選出された政治局委員の紹介のなかには、「第二経済委員会」の文字が入っていた。

軍需工業全般を掌握する第二経済委員会の存在は国内ですでに周知のことであり、海外でも亡命者たちの証言によって知られるようになった¹⁾。これが公の報道に現れたことは軍需工業部門が後継者の活動の基盤のひとつであることを示している。ところが、軍需工

業はそもそも軍事機密という壁もあり、資料が制約されるため、産業全体の状況はおろか個々の工場 の名称、位置、生産物などの基本的な内容がよく知られていない。そのうえ、日本植民地時代に建設された軍需工場がすべてそのまま継続して軍需生産を継続しているかのような誤解もある。そのため、ここでは、朝鮮民主主義人民共和国の軍需工業について、その現状を把握するための第一歩として、解放直後の軍需工業の状況を明らかにしたい。

一. 軍民転換

日本で一九四三年一〇月三一日に軍需会社法が公布、一二月一七日から施行され、一九四四年一〇月二八日に朝鮮、台湾といった植民地でも施行されることになっ

かにした(金日成「一九四八・六五―六六」)。

かつての軍需工業であっても多くの業種は、この軍民転換でそのまま製品を民需に回すことができ(表1~11)。しかし、この軍民転換によって、業種の転換がなされた工場の例として軽金属がある。軽金属は戦争の終結によって飛行機の製造という大きな需要がなくなり、また、そもそもその処理に多くの電力を必要とするため、その設備や施設を他の用途に用いることになった。朝鮮朝日軽金属岐陽工場、東洋金属工業新義州工場、東洋軽金属楊市工場がその代表であった。

朝鮮朝日軽金属岐陽工場はそもそも航空機用マグネシウム生産のため建設されていた工場であるが、完工を待たずに解放を迎えた。解放後はソーダ生産工場に転換され、岐陽化学工場として一九四六年一〇月に操業した。朝鮮戦争後は、小農機を生産する平壤農機具製作所に転換され、一九五六年に岐陽機械工場と改称、一九五八年一月に初の国産トラクターを生産するようになり、一九六二年には岐陽トラクター工場と呼ばれるようになった。岐陽トラクター

た。この施行によって、朝鮮にある会社五五社(うち朝鮮に本店がある会社三七社、内地に本店がある会社一八社)が軍需会社として指定された(『大阪朝日新聞』一九四四年一月二八日)。一九四五年八月一五日、朝鮮が日本の敗戦により解放を迎えると、ソ連軍占領下に入った朝鮮半島三八度線以北では、朝鮮人による日本人企業および対日協力者企業の接収が進められ、軍需会社法は事実上効力を失った。一〇月八日に開催された北朝鮮五道人民委員会連合会議では軍需工場を民需工場に転換する問題が討議され(柳文華「一九四九・一〇」)、一九四六年二月六日に成立した北朝鮮臨時人民委員会、六月二〇日、産業の復旧とともに軍需工業を平和産業に転換する事業を進めていることを明らかに

工場は一九七一年から拡張工事に入り、一九七三年七月二六日に金星トラクター工場として操業した（『昭和二十年度朝鮮年鑑』一二七ページ、『朝鮮中央年鑑』一九四九年版 一〇三ページ、『朝鮮大百科辞典（三）』一九九六年刊行 五二六―五二七ページ、『労働新聞』一九七三年七月二七日、キム・ジョンホ「一九八二・五六―六九」。この工場は、一九八五年一月二八日に金星トラクター総合工場に改称し、一九九二年一月に金星トラクター連合企業所となり、一九九四年一月に金星トラクター総合工場、二〇〇〇年一月に金星トラクター工場に復帰して現在にいたる。位置は南浦市江西区域岐陽洞である。

東洋金属工業新義州工場（平安北道新義州府倉浦洞、現・平安北道新義州市楽元一洞）もマグネシウムを生産する工場であり、一九三七年一月に着工されて一九四二年三月に操業し、その後、朝鮮神鋼金属工業新義州工場に改称したものであった。解放後は小農機具を生産する新義州機械製作所となり、対日協力者の工場とされた東洋商工鉄工所（鉾山機械を生産、平安北道新義州府柳上洞、現・平

安北道新義州市柳上二洞）を統合し、一九四七年一月一日に楽元機械製作所と改称、一九五五年に楽元機械工場に改称し、鉾山機械、建設機械、巻揚機を生産するようになった（株式会社神戸製鋼所「一九五四、一〇九・三九二」、神戸製鋼所「一九八三、五三三」、『昭和十九年度朝鮮年鑑』四二二、三三四ページ、『昭和二十年度朝鮮年鑑』二二七ページ、『朝鮮中央年鑑』一九五一年版 三五四ページ、『ホ・チョンシク「一九六九」、教育図書出版社「一九八九・一七〇」、『朝鮮大百科辞典（七）』一九九八年刊行 二九〇―二九一ページ、『朝鮮大百科辞典（二三）』二〇〇一年刊行 七ページ）。この工場は一九八五年六月に楽元機械連合企業所となり、二〇〇〇年一月に楽元機械工場になったが、九月には再び連合企業所となって現在にいたる。

東洋軽金属楊州市工場は航空機用アルミニウムを生産する工場として一九四三年に操業を開始した後、三井軽金属楊州市工場に改称したものである。解放後は農機具、巻揚機、炭車、熱具機関を製作する北中機械製作所に転換し、一九四九年には車輛生産の専門工場と

なった。そして、朝鮮戦争後はドイツ民主共和国の援助でデイーゼルエンジンを生産するようになった（『昭和二十年度朝鮮年鑑』一二六―一二七ページ、森田「一九六四・一一九」、『朝鮮中央年鑑』一九五〇年版 二七七ページ、『朝鮮中央年鑑』一九五一年版 一五二―一五三ページ、『労働新聞』一九五五年三月二五日、平壤師範大学地理学部「一九六四・四二八」、チャン・リヨンオク「一九七〇」、『金日成全集（四五）』二〇〇二年刊行 三二―四三ページ）。この工場は一九五六年に北中機械工場（別名、八月八日工場）となり、一九九〇年に北中機械連合企業所となって現在にいたる。位置は平安北道龍川郡である。

アルミニウムに関しては、解放当時建設中であつた住友金属元山工場（咸鏡南道徳源郡徳源郡北城面文坪里、現・江原道文川市文坪洞）と昭和電工鎮南浦工場（平安南道龍岡郡吾新面と多美面、現・南浦市大安区域）があつたが、解放後、前者は鉛および亜鉛を生産する文坪製錬所に転換され、後者はソ連軍により工場施設を解体没収され、工員養成所は軍事学校である平壤学院の校舎に利用された

（『昭和一三年朝鮮年鑑』四九八ページ、昭和電工株式会社社史編集室「一九七七、九五」、昭和電工株式会社アルミニウム社史編集事務局「一九八四・一一八―一二一」、チョン・ギジョン「二〇〇一・八二―八五」、鎮南浦会「一九八四・二九〇―二九一」、森田「一九六四・四七三」、教育図書出版社「一九九〇・三三二―三三四」）。

軽金属以外の業種で転換された工場には、朝鮮火薬製造海州工場と朝鮮無水酒精株式会社新義州アルコール工場の例がある。火薬を製造していた朝鮮火薬製造海州工場（現・黄海南道海州市邑波洞に位置）は解放後には染料を生産する海州化学工場に転換した（『昭和二十年度朝鮮年鑑』一二八ページ、『朝鮮中央年鑑』一九四九年版 一〇三ページ、教育図書出版社「一九八九・二〇三」、『労働新聞』二〇〇六年九月二三日）。朝鮮無水酒精株式会社新義州アルコール工場は一九三七年着工し、一九四〇年に竣工した航空燃料用アルコール生産工場であつたが、解放後は、再製酒とエーテルを生産する新義州無水酒精工場となり、朝鮮戦争後、醬油、味噌、焼酎、ビールを生産する新義州醸造工場、一

九六六年には抗生物質を生産する新義州マイシン工場に転換して今日にいたる（『昭和一三年朝鮮年鑑』五三三ページ、『朝鮮中央年鑑』一九四九年版 一〇三ページ、新義州市民会「一九六九・七八」、『労働新聞』二〇〇六年七月三十一日）。

こうした工場は民需用の工場となり、朝鮮戦争での軍事動員までは基本的に軍需品を生産していなかった。

ただし、火薬を製造する工場でも、一九三五年に操業した朝鮮素火薬興南工場（咸鏡南道咸州郡興南邑雲城里、現・咸鏡南道咸州市海岸区域雲城洞）は引き続き、火薬を製造していた。この工場は、解放後、興南人民工場に統合され、後に一七号工場となり、今日にいたる²⁾。

このほか東海側にあった石油関連施設は一部他業種に転換された。ライジングサン社が咸鏡南道徳源郡徳源郡北城面文坪里（現・江原道文川市文坪洞）に設置した文坪油槽所は文川機械製作所に転換され、後、文川バルブ工場（別名、文川機械工場、五月一八日工場）となり、現在にいたる（朝鮮總督府學務局社會課「一九三三・二五二」、『朝鮮中央年鑑』一九五

一五二年版 三五四ページ、教育図書出版社「一九九〇C・三二四―三二六」、『朝鮮大百科辞典（二七）』二〇〇一年刊行 五二二―五二四ページ）。一九三六年に操業した朝鮮石油元山製油所（咸鏡南道元山府浦下洞、現・江原道元山市場村洞）は、一九四七年四月五日に設立されたソ連との合弁企業である朝鮮石油株式会社に運営される元山石油工場になったが、一九五〇年二月に火災に遭い、一九五八年一月に、交通省傘下石綿工場を統合して元山化学工場となり、一九六〇年に感光紙職場、一九六三年にクロム職場、二〇〇〇年一〇月に石綿布職場、二〇〇九年四月に密封材職場を増設して、今日では、明礬、酸化クロム、無水クロム酸、重クロム酸ソーダ、石綿糸、石綿布、印画紙、感光紙、密封材などを生産している³⁾。

二．兵器工場の再建

植民地時代の朝鮮に唯一建設された兵器工場は、一九一七年に平壤府平川里（現・平壤市平川区域平川一洞）に設置された平壤兵器製造所であり、そこには迫撃砲・平射砲の砲弾の組み立て、砲の一部付属品の交換修理と、弾薬箱、

馬車と馬具を作る二個の職場があった⁴⁾。この兵器工場は日本人の撤収時に破壊され、一九四五年一〇月二日に金日成がこの再建を指示した。この工場は二五号工場と名付けられ、一九四七年六月に基本建物と付属建物が建設され、旋盤、フライス盤、ボール盤をはじめとする工作機械と付帯設備が基本的に備えられると、金日成がこの工場に工具と機械を供給する平壤機械製作所（別名、中央機械製作所）を併設するよう指示を出した。二五号工場では一九四八年

ク／キム・ピョンジン／リム・チュンシク「一九八九・三四―三八」、『金日成著作集（五）』一九八〇年刊行 二九七―三〇一ページ、玄武光「一九八〇」、『金日成全集（八）』一九九四年刊行 四八五―四八九ページ、科学百科辞典総合出版社「一九八一・二七七」、チョン・ギジョン「二〇〇一・五三九」、『労働新聞』一九九八年一月七日および一九九八年一月二日）。それらの工場が今日の多くの軍需工場の基本をなすことになる。

三月に機関銃の試作品を製作し、一二月一二日に金日成を招いて機関銃の試験射撃を行った。一九四九年二月、二五号工場は平壤機械製作所を統合して総合兵器工場となり、六五号工場と改称した。この当時、機関銃職場、迫撃砲職場、弾丸職場、手榴弾職場のような専門職場と工具職場、鋳物職場、鍛造職場などの補助職場があった。

朝鮮戦争中、六五号工場の分散移転によって、六五号工場のほかに二六号工場、七六号工場、一〇七号工場、四二号工場、二〇五号工場、一四五号工場が建設されるようになった⁵⁾。とくに六五号工場の本体は一九五〇年七月に移転先が平安南道咸川郡通仙面君子里（現・平安南道咸川郡君子里）に決定されており、真つ先に移転がなされた⁶⁾。六五号工場は一九五

一九五〇年に朝鮮戦争が勃発して平壤が米軍の空襲を受けるようになる、六五号工場は弾薬職場、手榴弾職場、砲弾職場、装薬職場をそれぞれ独自の軍需工場に分離して、分散疎開することになった（ソン・ジョンシク／キム・テグ

八年までに慈江道前川郡鶴舞労働者区に移転し、今日、二・八機械総合工場、二・八機械連合企業所とも呼ばれており、主に銃砲類を製造する兵器工場である⁷⁾。これとともに、六五号工場の一

部であった平壤機械製作所は一九五一年一〇月に山間部である慈江道熙川への移転を指示され、一月二二日に工事が始まった（李元官「一九六九」）。そして、一九五四年七月二二日に熙川機械工場として竣工した。さらに、熙川機械工場はソ連とチェコスロバキアからの戦後復旧援助を受けて拡張し、一九五八年一月二日に熙川工作機械工場として竣工した（『労働新聞』一九五八年一月四日、マルティノフ「一九七〇」一〇五）。熙川工作機械工場は軍民両用の工作機械専門工場であり、一九八八年に熙川工作機械総合工場となり、一九九二年に熙川工作機械総合企業所となったが、二〇〇〇年に熙川工作機械工場、二〇〇九年に熙川工作機械総合工場に復帰し、二〇一〇年一二月から熙川蓮河機械総合工場として今日にいたる。位置は慈江道熙川市全平洞である（教育図書出版社「一九九〇・三七八」）。前川郡と熙川市に兵器工場と機械工場が移転してきたことにより、慈江道は軍需工業と機械産業の中心的な地位を占めることになる。

（続く）

表2 植民地時代朝鮮半島北半部における日本人所有企業と解放後のその継承（有煙炭鉱）

植民地時代	位置（現在）	解放後
明治工業古乾原炭鉱 （旧・朝鮮有煙炭古乾原炭鉱）	咸鏡北道	古乾原炭鉱
明治鉱業訓戎炭鉱	〃	下面炭鉱
朝鮮人造石油阿吾地炭鉱	〃	阿吾地炭鉱、後、6月13日炭鉱
岩村鉱山遊仙炭鉱	〃	遊仙炭鉱
岩村鉱山鶏林炭鉱	〃	新遊仙炭鉱、後、遊仙炭鉱に統合
明治鉱業沙里院炭鉱 （旧・明治鉱業沙里院炭鉱、 鳳山炭鉱株式会社鳳山炭鉱）	黄海南道	沙里院炭鉱と鳳山炭鉱に分離
明治鉱業安州炭鉱	平安南道	安州炭鉱

（出所）『昭和13年朝鮮年鑑』、『昭和二十年度朝鮮年鑑』、黄海道 [1933]、朝鮮總督府事務局社会課 [1933]、三宅 [1937]、明治鉱業株式会社史編纂委員会 [1957]、カン・チョルプ [1985]、教育図書出版社 [1987]、教育図書出版社 [1990b]、教育図書出版社 [1989]、教育図書出版社 [1990b]、教育図書出版社 [1990c]、教育図書出版社 [1990d]、『朝鮮中央年鑑』各年版、『朝鮮大百科辞典』各巻、『労働新聞』、『民主朝鮮』。

表4 植民地時代朝鮮半島北半部における日本人所有生産施設と解放後のその継承（アルミ、マグネシウムを除く非鉄金属鉱業）

植民地時代	生産物	位置（現在）	解放後
日本鉱業遠北鉱山	金・銀	江原道	金化鉱山
日本鉱業楽山鉱山	〃	黄海南道	楽淵鉱山
日本鉱業発銀鉱山	〃	慈江道	零時鉱山
日本鉱業大楡洞鉱山	〃	平安北道	大楡洞鉱山
日本鉱業御宮鉱山	〃	〃	天摩鉱山 （多金属鉱山に転換）
日本鉱業雲山鉱山	〃	〃	雲山鉱山
日本鉱業成興鉱山	〃	平安南道	成興鉱山、後、10月26日総合企業所
日本鉱業遂安鉱山	モリブデン	黄海南道	金花鉱山 （金生産に転換）
日本鉱業箕州鉱山	タングステン	〃	谷山鉱山、後、萬年鉱山
百年山タングステン鉱山	〃	〃	谷山鉱山に統合。
朝鮮鉱業振興伊川鉱山	ニッケル	江原道	板橋鉱山
日本鉱業養津鉱山	銅、鉛、亜鉛	黄海南道	養津鉱山
日本鉱業検徳鉱山	〃	咸鏡南道	剣徳鉱山
三成鉱業成川鉱山	〃	平安南道	成川鉱山
日本鉱業鎮南浦製錬所	金・銀・銅・亜鉛（製錬）	南浦市	東洋製錬所、後、南浦製錬所
日本窒素開発興南製錬所	ニッケル（製錬）	咸鏡南道	興南製錬所
中外鉱業株式会社海州製錬所	金・銀・銅（製錬）	黄海南道	朝鮮戦争で全焼、後、燐肥料生産の海州製錬所。

（出所）『昭和13年朝鮮年鑑』、『昭和二十年度朝鮮年鑑』、黄海道 [1933]、朝鮮總督府殖産局鉱山課 [1935]、日本鉱業株式会社 [1957]、鎮南浦会 [1984]、企画本部社史編纂室編 [1992]、教育図書出版社 [1988]、教育図書出版社 [1989]、教育図書出版社 [1990c]、『朝鮮中央年鑑』各年版、『朝鮮大百科辞典』各巻、『労働新聞』、『民主朝鮮』。

表1 植民地時代朝鮮半島北半部における日本人所有企業と解放後のその継承（無煙炭鉱）

植民地時代	位置（現在）	解放後の名称
朝鮮無煙炭黒嶺炭鉱	平壤市	黒嶺炭鉱
朝鮮無煙炭徳山炭鉱	〃	黒嶺炭鉱に統合、後、分離して徳山炭鉱
朝鮮無煙炭江東炭鉱 （旧・朝鮮電気興業江東炭鉱）	〃	江東炭鉱、三神炭鉱に統合後、ふたたび分離。
朝鮮無煙炭三神炭鉱	〃	三神炭鉱。
海軍省平壤炭鉱	〃	寺洞炭鉱。
朝鮮無煙炭江原炭鉱	江原道	江原炭鉱
朝鮮無煙炭文川炭業所	〃	文川炭鉱
朝鮮無煙炭新倉炭鉱	平安南道	新倉炭鉱、後、新倉青年炭鉱
朝鮮無煙炭徳川炭鉱	〃	徳川炭鉱
朝鮮無煙炭龍潭炭鉱	〃	价川炭鉱に統合、後、藍田炭鉱として分離。
朝鮮無煙炭鳳泉炭鉱 （旧・鳳泉無煙炭鳳泉炭鉱）	〃	鳳泉炭鉱
大東鉱業龍登炭鉱	平安北道	龍登炭鉱
大東鉱業高原炭鉱	咸鏡南道	高原炭鉱

（出所）『昭和13年朝鮮年鑑』、『昭和二十年度朝鮮年鑑』、朝鮮總督府事務局社会課 [1933]、カン・チョルプ [1985]、教育図書出版社 [1987]、教育図書出版社 [1989]、教育図書出版社 [1990a]、教育図書出版社 [1990b]、教育図書出版社 [1990c]、『朝鮮中央年鑑』各年版、『朝鮮大百科辞典』各巻、『労働新聞』、『民主朝鮮』。

表3 植民地時代朝鮮半島北半部における日本人所有企業と解放後のその継承（鉱業・鉄鉱）

植民地時代	位置（現在）	解放後の名称
日本製鉄殷栗鉱山（旧・富田鉱業殷栗鉱山）	黄海南道	殷栗鉱山
日本製鉄載寧鉱山 （旧・西崎鉱業所載寧鉄山、三菱製鉄載寧鉄山）	〃	載寧鉱山
日本製鉄下聖鉱山	〃	新院鉱山
日本製鉄銀龍鉱山 （旧・三菱製鉄銀龍鉄山、三菱鉱業銀龍鉱山）	〃	載寧鉱山に統合
日本製鉄兼二浦鉱山 （旧・三菱鉱業兼二浦鉱山、三菱製鉄兼二浦鉱山）	黄海南道	松林鉱山
三井鉱業价川鉱山 （旧・日本製鋼所价川鉄山、輸西製鉄价川鉱山）	平安南道	泉洞鉱山
利原鉄山利原鉱山	咸鏡南道	利原鉱山 （雲母生産に転換）
茂山鉱山開発茂山鉱山 （旧・三菱鉱業茂山鉱山）	咸鏡北道	茂山鉱山

（出所）『昭和13年朝鮮年鑑』、『昭和二十年度朝鮮年鑑』、教育図書出版社 [1990a]、朝鮮總督府内務局社会課 [1922]、黄海道 [1933]、朝鮮總督府殖産局鉱山課 [1935]、日本製鉄株式会社史編纂委員会編 [1959]、教育図書出版社 [1987]、教育図書出版社 [1990b]、『朝鮮中央年鑑』各年版、『朝鮮大百科辞典』各巻、『労働新聞』、『民主朝鮮』。

表6 植民地時代朝鮮半島北半部における日本人所有生産施設と解放後のその継承（鉄鋼および特殊鋼）

植民地時代	生産物	位置（現在）	解放後
日本製鉄兼二浦製鉄所（旧・三菱製鉄兼二浦製鉄所）	鉄鋼	黄海北道	黄海製鉄所
日本製鉄清津製鉄所	〃	咸鏡北道	清津製鉄所、後、金策製鉄所
三菱製鉄清津製鋼所	〃	〃	清津製鋼所
朝鮮製鉄大安電機製錬工場（建設中）	〃	南浦市	降仙製鋼所江西分工場、江西電氣製作所に転換、後、大安電機工場
三菱製鋼降仙電機製錬工場（建設中）	〃	〃	降仙製鋼所、後、千里馬製鋼所
日本高周波重工城津製鋼所	特殊鋼	〃	城津製鋼所

（出所）『昭和13年朝鮮年鑑』、『昭和18年度朝鮮年鑑』、日本製鉄株式会社 [1959]、カン・チョルプ [1985]、教育図書出版社 [1989]、『朝鮮中央年鑑』各年版、『朝鮮大百科辞典』各巻、『労働新聞』、『民主朝鮮』。

表8 植民地時代の朝鮮半島北半部における日本人所有生産施設と解放後のその継承（化学肥料およびカーバイド）

植民地時代	生産物	位置（現在）	解放後
日本窒素肥料興南工場	化学肥料	咸鏡南道	興南地区人民工場、後、興南肥料工場
日本化学順川工場	〃	平安南道	順川石灰窒素肥料工場
朝鮮日産化学鎮南浦工場	〃	南浦市	南浦製錬所肥料職場
日本窒素本宮カーバイド工場	カーバイド	咸鏡南道	本宮化学工場、後、咸興化学工場
朝鮮電気冶金富寧工場	〃	咸鏡北道	富寧冶金工場（珪素鉄、チタン鉄、クロム鉄を生産）、後、富寧合金鉄工場
日本窒素青水化学工場（建設中）	〃	平安北道	青水化学工場

（出所）『昭和13年朝鮮年鑑』、『昭和二十年度朝鮮年鑑』、朝鮮總督府學務局社会課 [1933]、咸鏡南道 [1939]、森田 [1964]、森田・長田 [1980]、鎮南浦会 [1984]、カン・チョルプ [1985]、教育図書出版社 [1989]、教育図書出版社 [1987]、リョム・テギ [1994]、『朝鮮中央年鑑』各年版、『朝鮮大百科辞典』各巻、『労働新聞』、『民主朝鮮』。

表10 植民地時代の朝鮮半島北半部における日本人所有生産施設と解放後のその継承（軽工業）

植民地時代	生産物	位置（現在）	解放後
王子製紙新義州工場	紙	平安北道	新義州製紙工場、後、新義州化学繊維工場（スフ、人絹糸生産）に転換
鐘紡パルプ新義州工場	パルプ	〃	新義州パルプ工場
北鮮製紙吉州工場	〃	咸鏡北道	吉州パルプ工場
鐘紡平壤化学工場	スフ	平壤市	平壤化学工場、後、平壤紡織工場
東洋製糸平壤工場	生糸	〃	平壤製絲工場
日本紡織清津工場	人絹糸	咸鏡北道	清津紡績工場、後、清津化学繊維工場に転換
片倉製絲紡績咸興製絲所	生糸	咸鏡南道	咸興製絲工場
日本穀物株式会社平壤工場	穀物加工品	平壤市	平壤穀産工場

（出所）『昭和13年朝鮮年鑑』、朝鮮總督府學務局社会課 [1933]、片倉製絲紡績株式会社考査課 [1941]、成田 [1964]、鐘紡株式会社社会編纂室 [1988]、平壤郷土史編纂委員会 [1957]、新義州市民会 [1969]、教育図書出版社 [1989]、教育図書出版社 [1990b]、教育図書出版社 [1990a]、リョム・テギ [1994]、『朝鮮中央年鑑』各年版、『朝鮮大百科辞典』各巻、『労働新聞』、『民主朝鮮』。

表5 植民地時代朝鮮半島北半部における日本人所有生産施設と解放後のその継承（非金属鉱業）

植民地時代	生産物	位置（現在）	解放後
野崎鉱業業徳鉱山	黒鉛	咸鏡北道	業徳鉱山
東邦鉱業吉州鉱山	〃	〃	(不明)
東邦鉱業江界鉱山	〃	慈江道	東邦鉱山、後、8月8日鉱山、五一鉱山
東邦鉱業時中鉱山	〃	〃	時中鉱山
東拓鉱業臥龍鉱山	〃	黄海南道	(不明)
日立製作所笏洞鉱山	硼鉱	黄海北道	笏洞鉱山
東洋雲母砲手鉱山	雲母	咸鏡北道	南溪鉱山分鉱山、後、吉州絶縁物鉱山
朝鮮燐鉱新豊鉱山	燐灰石	咸鏡南道	東岩鉱山
朝鮮燐鉱永柔鉱山	〃	平安南道	永柔鉱山
朝鮮マグネサイト開発龍陽鉱山	マグネサイト	咸鏡南道	龍陽鉱山
日本マグネシウム金属北斗鉱山	〃	〃	大興青年鉱山北斗分鉱山
日本マグネサイト化学白岩鉱山	〃	両江道	南溪鉱山

（出所）『昭和十九年度朝鮮年鑑』、『昭和二十年度朝鮮年鑑』、教育図書出版社 [1987]、教育図書出版社 [1990b]、教育図書出版社 [1990e]、『朝鮮中央年鑑』各年版、『朝鮮大百科辞典』各巻、『労働新聞』、『民主朝鮮』。

表7 植民地時代の朝鮮半島北半部における日本人所有生産施設と解放後のその継承（電力）

植民地時代	位置（現在）	解放後
日本窒素赴戦江発電所	咸鏡南道	赴戦江発電所
朝鮮電業長津江発電所	〃	長津江発電所
朝鮮電業虚川江発電所	〃	虚川江発電所
朝鮮電業秀魯江発電所	慈江道	秀魯江発電所、後、将子江発電所
朝鮮電業西頭水発電所	咸鏡北道	西頭水電所、後、3月17日発電所
朝鮮電業輪城川発電所	〃	富寧発電所
鮮満鴨緑江水豊発電所	平安北道	水豊発電所

（出所）『昭和13年朝鮮年鑑』、朝鮮電力事業史編纂委員会 [1981]、カン・チョルプ [1985]、教育図書出版社 [1987]、教育図書出版社 [1989]、教育図書出版社 [1990c]、教育図書出版社 [1990b]、『朝鮮中央年鑑』各年版、『朝鮮大百科辞典』各巻、『労働新聞』、『民主朝鮮』。

表9 植民地時代の朝鮮半島北半部における日本人所有生産施設と解放後のその継承（化学肥料およびカーバイド）

植民地時代	位置（現在）	解放後
朝鮮小野田セメント勝湖里工場	平壤市	勝湖里セメント工場
朝鮮小野田セメント川内里工場	江原道	川内里セメント工場
朝鮮小野田セメント古茂山工場	咸鏡北道	古茂山セメント工場
朝鮮セメント海州工場	黄海南道	海州セメント工場
朝鮮浅野セメント鳳山工場	黄海北道	2・8馬河セメント工場

（出所）『昭和13年朝鮮年鑑』、『昭和二十年度朝鮮年鑑』、咸鏡南道 [1939]、朝鮮總督府學務局社会課 [1933]、小野田セメント株式会社七十年史編纂委員会 [1952]、社会編纂委員会編 [1955]、森田 [1964]、カン・チョルプ [1985]、黄海道誌編纂委員会 [1982]、教育図書出版社 [1989]、教育図書出版社 [1990c]、教育図書出版社 [1990b]、教育図書出版社 [1990d]、『朝鮮中央年鑑』各年版、『朝鮮大百科辞典』各巻、『労働新聞』、『民主朝鮮』。

表11 植民地時代の朝鮮半島北半部における日本人所有生産施設と解放後のその継承（機械類）

植民地時代	位置（現在）	解放後
東亜窯業鏡城工場	咸鏡北道	朱乙窯業工場、後、6月5日電氣工場、鏡城磚子工場
鐘紡朱乙亜麻工場	〃	朱乙亜麻工場、後、朱乙ロープ工場、3月13日水産機械工場に転換、3月13日工場（電気機械）
鐘紡西鮮重工海州工場	黄海南道	鉄鋼機械を生産する海州機械製作所、後、海州1月10日機械工場
日本窒素九龍里工作所	咸鏡南道	化学機械を生産する興南地区人民工場龍城工作所、後、龍城機械製作所、龍城機械工場
朝鮮商工鎮南浦鉄工所	南浦市	南浦造船所

（出所）『昭和二十年度朝鮮年鑑』、朝鮮總督府内務局社会課 [1922]、鎮南浦会 [1984]、森田 [1964]、鐘紡株式会社社会編纂室 [1983]、教育図書出版社 [1989]、教育図書出版社 [1990b]、『朝鮮中央年鑑』各年版、『朝鮮大百科辞典』各巻、『労働新聞』、『民主朝鮮』。

《注》

- (1) 第二経済委員会の存在を最初に明らかにしたのは、元外交官の亡命者である高英煥の著作である(高英煥「一九九二・四四一四五」)。第二経済委員会の機構については、この高英煥および人民武力部で貿易に携わった亡命者である崔主活の一九九七年にアメリカ議会上院において行った証言(“Prepared Statement of Ko Young-Hwan Former Official, Ministry of Foreign Affairs North Korean Missile Proliferation Hearing before the Subcommittee on International Security, Proliferation, and Federal Services of the Committee on Governmental Affairs United States Senate.”一九九七年一月二二日)、そして、軍需工場が多く配置されている江界市にいた亡命者である高青松の著書がある(高青松「二〇〇一・二二一三〇」)。第二経済委員会庁舎の位置に関しては、平壤市江東郡邑で、「江東郡檀君陵から東北方向にある標高五〇〇メートルほどの鷲峰山中腹部」であるとの情報があるが(玉城「一九九八年」)、「鷲峰山(ノボンサン)」は「鷲峰山(チュボンサン)」の誤りである。この同じ誤りは韓国で出版された地図帳にも見られる(李泳澤「一九九二」)。なお、第二経済委員会が組織された時期について高青松は一九五八年としているが(高青松「二〇〇一・二二一三」)、これは他の資料によって確認することができない。
- (2) 三宅「一九三七」に掲載された「日寇コンツェルン一覽圖」、『昭和三年朝鮮年鑑』五二四―五二五ページおよび七七六―七七七ページ、咸鏡南道「一九三九・九五」、『国史編纂委員会「一九九八b」に収録された「一九五三年度朝鮮労働党中央委員会全
- 員会議・政治・組織・常務委員会決定集」、教育図書出版社「一九八七・三六〇―三六四、四九八」。この工場は公式報道の中では、名称を隠して「ハン・ジェウク同務の工場」となっていた(『労働新聞』一九九三年二月九日、一九九三年四月三日、一九九五年八月一七日、一九九九年四月二日、一九九九年八月二五日、一九九九年十二月六日)。
- (3) 『昭和一三年朝鮮年鑑』七八七―七八八ページ、咸鏡南道「一九三九・九五」、日本石油株式会社・日本石油精製株式会社社史編さん室編「一九八八・三一五―三一六」、教育図書出版社「一九九〇c:三二七―三二八」、国史編纂委員会「一九九五」に収録された「朝鮮石油株式会社創立協定書」および同「朝鮮石油株式会社管理理事会議録」、同「朝鮮石油株式会社管理理事会議録」、国史編纂委員会「一九九八a」に収録された「党中央政治委員会第五次会議決定書一九五〇年三月六日」。この元山石油工場のほか、ソ連との合弁会社が設立された工場として、人造石油工場として一九三六年四月に着工され一九三七年
- 五月に操業した朝鮮石炭工業阿吾地工場があるが、その合弁会社である朝鮮合成液体燃料株式会社については後に解散したことのほかはよく知られていない(『昭和一三年朝鮮年鑑』四九七、五二三ページ、教育図書出版社「一九九〇b:三四五―三五二」、『労働新聞』一九五五年六月三日)。この阿吾地化学工場の石炭化学工業は引き継がれ、一九六二年五月にメタノール生産ラインが操業、一九六七年四月に窒素肥料生産ラインが操業、一九八二年にソ連からの借款でアンモニア生産ラインが操業したことが発表されている(『労働新聞』一九六二年五月三〇日および一九六七年四月四日、マルティノフ「一九七〇:一一六」、アンドレーエフ/オーシポフ「一九八四:二三」)。阿吾地化学工場は一九八一年五月に七月七日工場に改称し(クオン・ドンウク「一九九〇:九三―九九」)、一九九四年に七月七日連合企業所となり現在にいたる。この工場がミサイル燃料や化学兵器、砲弾を製造しているとの情報もあるが(李福九「二〇〇六:五七一―六一」、高青松「二

〇〇一・七三」、新東亜特別取材班「二〇〇一・二〇三―二〇四」、いずれの証言者も当地にいたものではないため真偽は不明である。

(4)平壤郷土史編集委員会「一九五七・二五八」、ソン・ジョンシク／キム・テグク／キム・ピョンジン／リム・チュンシク「一九八九・三二―三三」、朝鮮總督府學務局社會課「一九三三・二五一」。ただし、ソン・ジョンシク／キム・テグク／キム・ピョンジン／リム・チュンシクの著書には「一九二三年に日本九州にある兵器廠の傘下付属工場として設立」とあるが、これは誤りで、一九二三年には東京造兵工廠が陸軍造兵廠に改編され、平壤兵器製造所と小倉兵器製造所はその直轄となった。

(5)これらの工場は後方總局軍需生産局の傘下であった(国史編纂委員会「一九九八a」に収録された「朝鮮労働党中央政治委員会決定集(一九四七・八一―一九五三、七朝鮮労働党中央委員会)」)。

(6)教育図書出版社「一九九〇f・三八一」。他の工業施設の疎開が決定されたのは、一九五一年

一月二三日の内閣決定第一九一号による(キム・チョンイル「一九五八・二一九―二二〇」、科学・百科辞典出版社「一九八一・二八七」)。

(7)六五号工場が君子里にあったのは一九五三年二月二日の金日成訪問のときまで確認される(チョ・ドンソプ「一九七四」、チェ・ウォンソ「一九七八」、労働新聞「一九九三年五月二四日」。また、六五号工場、二・八機械総合工場、二・八機械連合企業所が同一工場であることは高青松「二〇〇一・二二」のほか、『労働新聞』二〇一一年一〇月三〇日で二・八機械総合工場の創立が一九四五年一〇月とされていることなどから確認される。

【文献目録】

《日本語文献》
●アンドレーエフ、V.I.V.I.オーシポフ「一九八四」「ソ連と朝鮮民主主義人民共和国の相互の利益になる協力方針」『極東の諸問題』第一三巻第一号三月。
●李福九「二〇〇六」『標的は東京―北朝鮮弾道ミサイルの最高機密―』金燦編・訳 徳間書店。

店。 会社。

●小野田セメント株式会社七十年史編纂委員会「一九五二」『回顧七十年』小野田セメント株式会社七十年史編纂委員会。

●片倉製絲紡績株式会社考査課編「一九四二」『片倉製絲紡績株式会社二十年誌』片倉製絲紡績株式会社考査課。

●鐘紡株式会社社史編纂室編「一九八八」『鐘紡百年史』鐘紡株式会社。

●株式会社神戸製鋼所「一九五四」『神鋼五十年史』株式会社神戸製鋼所。

●咸鏡南道「一九三九」『道勢一斑昭和十三年版』出版地記載なし 咸鏡南道。

●企画本部社史編纂室編「一九九二」『日本曹達七〇年史』日本曹達株式会社。

●高青松「二〇〇二」『金正日の秘密兵器工場―腐敗共和国からのが脱出記―』中根悠訳 ビジネス社。

●黄海道「一九三三」『昭和八年黄海道々勢一斑』京城 黄海道。

●神戸製鋼所「一九八三」『神戸製鋼八〇年』神戸製鋼所。

●社史編纂委員会編「一九五五」『七十年史』日本セメント株式会社。

●昭和電工株式会社アルミニウム社史編纂事務局編「一九八四」『昭和電工アルミニウム五十年史』昭和電工株式会社。

●昭和電工株式会社社史編纂室「一九七七」『昭和電工五十年史』昭和電工。

●玉城素「一九九八」『四重経済とは何か』関川夏央・恵谷治・NK会編『北朝鮮の延命戦争―金正日・出口なき逃亡路を読む―』ネスコ。

●朝鮮總督府學務局社會課「一九三三」「工場及鑛山に於ける労働状況調査」京城府 朝鮮總督府 再版(近現代資料刊行会企画編輯『戦前・戦中期アジア研究資料―植民地社会事業関係資料集「朝鮮編」二〇』近現代資料刊行会 一九九九年に収録)。

●朝鮮總督府殖産局鉦山課編「一九三五」『朝鮮鉦業の趨勢』京城府 朝鮮鉦業会。

●朝鮮總督府内務局社會課「一九二二」『會社及工場に於ける労働者の調査』京城府 朝鮮總督府 再版(近現代資料刊行会企画編輯『戦前・戦中期アジア研究資料―植民地社会事業関係資料集「朝鮮編」二〇』近現代資料

集「朝鮮編」二〇』近現代資料

料刊行会 一九九九年に収録）。

年。

集「朝鮮民主主義人民共和国樹立の道」平壤 労働党出版社。

『朝鮮地理全書(革命事跡地理)』出版地記載なし 教育図書出版社。

●朝鮮電気事業史編集委員会編「一九八二」『朝鮮電気事業史』社団法人中央日報協会。

●森田芳夫・長田かな子編「一九八〇」『朝鮮終戦の記録—資料第三卷—』巖南堂書店。

●高英煥「一九九二」平壤「二五時」ソウル コリョウオン。

●科学百科辞典総合出版社「一九八一」『朝鮮全史 二四』平壤科学百科辞典総合出版社。

●鎮南浦会編「一九八四」『よみがえる鎮南浦—鎮南浦終戦の記録』鎮南浦会。

●『昭和一三年朝鮮年鑑』京城府 京城日報社・毎日申報社 一九三七年。

●教育図書出版社「一九八七」『朝鮮地理全書(咸鏡南道)』出版地記載なし 教育図書出版社。

●国史編纂委員会「一九九五」『北韓関係史料集二〇』果川 国史編纂委員会。

●成田潔英編「一九六四」『王子製紙南方事業史』王子製紙社史編纂室。

●『昭和一八年度朝鮮年鑑』京城府 京城日報社一九四二年。

●教育図書出版社「一九八八」『朝鮮地理全書(黄海南道)』出版地記載なし 教育図書出版社。

●国史編纂委員会「一九九八a」『北韓関係史料集二九』果川 国史編纂委員会。

●日本鉱業株式会社「一九五七」『日本鉱業株式会社五十年史』日本鉱業株式会社。

●『昭和二十年朝鮮年鑑』京城府 京城日報社 一九四四年。

●教育図書出版社「一九八九」『朝鮮地理全書(工業地理)』出版地記載なし 教育図書出版社。

●国史編纂委員会「一九九八b」『北韓関係史料集三〇』果川 国史編纂委員会。

●日本製鉄株式会社史編纂委員会編「一九五九」『日本製鉄株式会社史』日本製鉄株式会社。

◆『朝鮮語文獻』

●『朝鮮地理全書(平壤市)』出版地記載なし 教育図書出版社。

●リヨム・テギ「一九九四」『朝鮮民主主義人民共和国化学工業史(一)』平壤 社会科学出版社。

●日本石油株式会社・日本石油精製株式会社史編さん室編「一九八八」『日本石油百年史』日本石油株式会社。

●カン・チョルプ編「一九八五」『産業国有化経験』平壤 社会科学出版社一九八五年。

●教育図書出版社「一九九〇b」『朝鮮地理全書(咸鏡北道)』出版地記載なし 教育図書出版社。

●柳文華「一九四九」『解放後四年間の国内外重要日誌—一九四五年八月—一九四九年三月—』民主朝鮮社(金南植・李庭植・韓洪九編『韓国現代史資料二』ソウル トルベゲに収録)。

●三宅晴輝「一九三七」『日本コソツエルン全書(XI)』新興コソツエルン讀本 東京 春秋社(日本図書センターより一九九九年影印復刻)。

●クオン・ドンウク「一九九〇」『知られざる地名一つをとりあげて』『人民の中で(四六)』平壤 朝鮮労働党出版社。

●教育図書出版社「一九九〇c」『朝鮮地理全書(江原道)』出版地記載なし 教育図書出版社。

●李元官「一九六九」『母工場』の歴史を振り返って『人民の中で(五)』平壤 朝鮮労働党出版社。

●明治鉱業株式会社社史編纂委員会編「一九五七」『社史—明治鉱業株式会社』明治鉱業株式会社。

●キム・ジョンホ「一九八二」『重要な会議も後回しにして』『人民の中で(二九)』平壤 朝鮮労働党出版社。

●教育図書出版社「一九九〇e」『朝鮮地理全書(慈江道)』出版地記載なし 教育図書出版社。

●ソン・ジョンシク/キム・テグク/キム・ピョンジン/リム・チュンシク「一九八九」『解放

●森田芳夫「一九六四」『朝鮮終戦の記録』巖南堂書店一九六四

●金日成「一九四八」『重要報告

●教育図書出版社「一九九〇f」

●教育図書出版社「一九九〇g」

後革命と建設経験二」平壤 朝鮮労働党出版社。

●新東亜特別取材班「二〇〇二」

「北韓核物質生産基地は平北大館郡天摩山地下にある」『新東亜』第四卷第八号 八月。

●新義州市民会「一九六九」『新義州市誌』出版地記載なし 新義州市民会。

●李泳澤編「一九九一」『最新北韓地圖』ソウル 佑晋地圖文化社。

●チャン・リョンオク「一九七〇」『温かい懐で』『人民の中で(二)』平壤 一九六八年朝鮮労働党出版社発行 九月書房翻刻。

●チョン・ギジョン「二〇〇一」『閱兵広場』平壤 文化芸術総合出版社。

●チョ・ドンソプ「一九七四」『人民の中で』労働者たちは金よりも貴重です』『労働新聞』一九七四年九月五日。

●チェ・ウォンソ 「一九七八」『砲火のなかで建てられた最初の工場大学』『人民の中で(一六)』平壤 朝鮮労働党出版社。

●平壤師範大学地理学部「一九六四」『朝鮮地理小便利』平壤科学知識普及出版社。

●平壤郷土史編集委員会「一九五

七」『平壤誌』平壤 国立出版社。

●ホ・チョンシク「一九六九」『党はいつも楽元の皆様がたを忘れていません』『人民の中で(五)』平壤 朝鮮労働党出版社。

●玄武光「一九八〇」『最初の機関銃が出るまで』『人民の中で(二三)』平壤 朝鮮労働党出版社。

●黄海道誌編纂委員会編「一九八二」『黄海道誌』ソウル 黄海道誌編纂委員会。

●『金日成著作集』各巻 平壤 朝鮮労働党出版社。

●『金日成全集』各巻 平壤 朝鮮労働党出版社。

●『朝鮮中央年鑑』各年版 平壤 朝鮮中央通信社。

●『朝鮮大百科辞典』各巻 平壤 百科辞典出版社。

●『労働新聞』

●『民主朝鮮』

《ロシア語文献》

●マルティノフ・V・V「一九七〇」『朝鮮—朝鮮民主主義人民共和国と南朝鮮の経済地理的特徴—』モスクワ ムイスリ。

《英語文献》

●“Prepared Statement of Ko

Young-Hwan Former Official, Ministry of Foreign Affairs North Korean Missile Proliferation Hearing before the Subcommittee on International Security, Proliferation, and Federal Services of the Committee on Governmental Affairs United States Senate,” October 21, 1997.

●“North Korean Mass Destruction Weapons Prepared Statement of Ju-Hwal Choi Former Official Ministry of the People's Army North Korea North Korean Missile Proliferation Hearing before the Subcommittee on International Security, Proliferation, and Federal Services of the Committee on Governmental Affairs United States Senate,” October 21, 1997.